

図書館便り 七十四号 高野山大学図書館

西行歌「道の辺に」をよむ

高野山大学教授・図書館長 下西 忠

栃木県那須郡那須町に芦野という地がある。JR東北本線黒田原駅から車で十分あまりのところにある静かな田園がひろがる地である。現在では芦野温泉があり、東京からもこの温泉に入るために多くの人が訪ねてくるらしい。その温泉から徒歩十分ほどのところに通称「遊行柳」として知られた西行ゆかりの地がある。

平成二十三年三月に発生した東日本大震災の三ヶ月後に私はこの「遊行柳」と白河関跡を訪ねた。目的は西行が詠んだ和歌の足跡をたどるためであった。西行は奥州への旅の途中この地でひとときの休息をとった。そのときの和歌が次の歌である。

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ち止まりつれ（新古今集・夏）

この歌は後年謡曲「遊行柳」に取り込まれ、さらに『奥の細道』で芭蕉がこの地を訪れて「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」の句を詠んだことで知られているものである。

歌意は、道のほとりに清水が流れている柳の木陰、ほんのしばらくの間と思つて立ちどまつたのであるが、あまりの涼しさに思わず時を過ぎってしまった、ということになる。なんともいえぬ清涼感が漂ってくる。夏の日の暑さと木陰の涼しさを単純に描きだしているのだが、一人の旅人が腰をおろして休息をとっている光景はあたかも一幅の絵画を想像させる。

ところで、芭蕉の句はいまでもなく西行歌を意識して詠んでいることは、「立ち去る」「柳かな」で容易に理解できる。西行の「立ち止まり」に対して芭蕉は「立ち去る」と詠み替えた。もともと俳諧そのものは「あいさつ」という性格をもつ。ここは単なる言葉の遊びだけでなく、私はこの句は芭蕉の西行に対する一種の心理的な別れの「あいさつ」としてとらえるべきであると思つている。そもそも『奥の細道』は、敬愛する西行を慕つての旅であるという一面をもっていることについては否定できない。西行没五百年後の旅、それが『奥の細道』なのである。したがつてこの「立ち去る」はたんに空間を立ち去るといっただけではなく、心理的な面、つまり西行の和歌の世界そのものから「立ち去る」という意味があると思われる。そこにはなみなならぬ芭蕉の決意が感じられよう。俳諧の道を確認した芭蕉は、西行の和歌の世界からぬけだして、さらなる新しい「俳諧の道」を求めて旅立ったのである。



茶話会

5/23

当日は本学学生教職員をはじめ、高野町民の方など30人ほどご参加いただきました。
 本学茶道部の方達に点てていただいたお茶はとてもおいしかったです。

2013年 7月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

2013年 8月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

	9:00-21:30		13:00-21:30
	9:00-17:00		休館日

平成 25 年度 第 2 回戸田文化講座
 高野山七口と参詣道について

日時
 7月11日(木曜日)17時～18時30分

場所
 高野山大学本館3階308号室

講師
 入谷和也
 (元和歌山県教育委員会教育企画員)

問合せ先
 高野山大学図書館(Tel.0736-56-3835)

